

2017 年度第 4 回支部集会【中部支部】

2017 年 7 月 8 日(土)10:00-16:15(受付開始:9:30)

名古屋工業大学 52号館

主催:公益社団法人日本語教育学会

会場:〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町 名古屋工業大学 52 号館

学内マップ:http://www.nitech.ac.jp/access/imgs/img_map_01.jpg

交通アクセス:<http://www.nitech.ac.jp/access/#a1>

JR 東海中央本線 鶴舞駅下車(名大病院口から東へ約 400m)

地下鉄鶴舞線 鶴舞駅下車(4 番出口から東へ約 500m)

桜通線吹上駅下車(5 番出口から西へ約 900m)

※ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。

参加費:1,000 円(当日会場にて現金でお支払いください)

※学会ウェブサイトの「マイページ」から事前登録をしていただくと、事前に口頭発表、ポスター発表の予稿集をダウンロードできます。ぜひ事前登録をご利用ください(予約なくても当日参加可能)。

◆支部集会日程◆

9:30	受付開始【52 号館入口ホール】
10:00-10:25	開会式【52 号館 5214】
10:30-12:00	研究発表(ポスター発表)【52 号館 5215】／交流ひろば【52 号館 5216・5217】
12:15-13:15	委員会コラボ企画「昼食交流会」 ・日本語教育縦断+横断 ワールドカフェ【52 号館 5214】 ・発表応募支援セミナー【52 号館 5218】
13:30-15:30	ワークショップ【52 号館 5214】 「見つめ直してみよう 対人関係とコミュニケーション」
15:45-16:15	研究発表(口頭発表)【52 号館 5215・5216・5217】

開会式 【10:00-10:25/52 号館 5214】

- ・「公益社団法人 日本語教育学会に期待すること」
尾崎 明人 (名古屋外国語大学・元日本語教育学会会長)
- ・「理念体系と新たな支部活動について」
衣川 隆生 (名古屋大学・日本語教育学会支部活動委員会委員長)
- ・★今日の発表者、出展者によるアピールタイム！！



研究発表(ポスター発表)

【10:30-12:00/52号館 5215】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム最終頁、詳細は予稿集原稿をご覧ください。

① 短期ジャパスタディプログラムにおける受講生の意識の変容

野村琴菜(お茶の水女子大学大学院生)・ケッチャム千香子(上智大学)・
高橋桂子(公益社団法人国際日本語普及協会)・難波房枝(武蔵野大学)・
村田マルゲティッチ恵美(クオアチアザグレブ大学)・堀井恵子(武蔵野大学)

② 進学後に必要な日本語能力とは—進学前後の留学生に対する調査からの一考察—

立澤亜沙希(名古屋福德日本語学院)

③ 海外の大人数クラスに対する効果的な初級会話指導方法—教師の指導日記の分析から—

水野沙江香(愛知工科大学外国語学校)

④ 背景要因の異なるタイ人学部留学生の学習ストラテジー使用要因の分析

—Oxford(2011)のS2Rモデルに基づいて—
MANJAITON SANI(名古屋大学大学院生)

交流ひろば

【10:30-12:00/52号館 5216-5217】

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。

【52号館 5216】

◆「パフォーマンステストのフィードバックにおける Can do チェックリストの活用」

藤森秀美(名古屋学院大学), 梶原彩子(同), 近藤行人(同), 田中典子(名古屋大学)
わたしたちの機関では、初級日本語クラスにおけるパフォーマンステストを行っています。このテストの評価基準、及び学生へのフィードバックのツールとして、テスト内容で教師が求める項目や要素を Can-do チェックリストを用いる試みを始めました。お越しいただいた方とともに、フィードバックの在り方について一緒に考えたいと思っています。

◆「専門講義理解支援のための説明活動—日韓プログラムでの取り組み—」

西坂祥平(名古屋大学大学院生), 近藤行人(名古屋学院大学)
私たちは学部進学を控える日韓共同理工系学部留学生を対象に、専門講義理解支援の取り組みを行っています。聴講した講義について学習者同士で理解をすりあわせ、その内容を他者に説明するというプロセスを通して、より深い理解を獲得する支援を試みました。なぜ説明活動を行うのか、説明活動の中で何が起こったのかについて、皆さんと共有したいと思います。



◆「イラストを使用した初級漢字教材」

上坂宗万(東京福祉大学)

様々な母語の留学生が一つのクラスで学ぶ際の初級漢字教材を開発中です。特定の言語を使わず、イラストだけで漢字を覚えさせる教材で、漢字によっては、コマ漫画で説明したりもします。将来的には、タブレットでの使用もさせていきたいです。興味のある方はぜひお越しください。

◆「工学部短期留学プログラムに付随する初級日本語コースにおける Can-Do 形式の利用と実践重視の課題の試み」

田中典子(名古屋大学), 蓮池いずみ (同)

私たちは工学部の短期留学プログラムに付随する初級日本語コースにおいて、学習者に学習目標および学習項目を Can-Do で示し、各単元で Can-Do 達成のための実践重視の課題を考えました。お越しいただいた方とともに初級日本語における学習の可視化や振り返りの方法について、考えたいと思っています。

【52 号館 5217】

◆「言語景観を教材とした社会文化的理解を目指す内容重視型日本語教育の研究」

磯野英治(名古屋商科大学)

言語景観を活用した内容重視の日本語教育(CBI)について、萌芽的な研究を行っています(科学研究費補助金若手研究(B)平成27-29年度採択課題)。これまでの研究成果を共有しつつ、枠組みの構築(カリキュラムのデザイン, 教材の制作, 授業実践, 評価など)に向けて意見を頂きながら議論し、ネットワークも作りたと思っています。興味のある方はぜひお越しください。

◆「バイリンガル研究への誘い」

呉禧受(名古屋大学)

バイリンガル研究は複数の言語環境にいる人のための研究ですが、言葉を違う局面から考える機会にもなると思います。バイリンガリズムを理解することは、日本語教育などの第2言語習得研究にも役に立つと考えています。興味のある方と意見交換できると嬉しいです。

◆「名古屋大学短期日本語プログラム(NUSTEP)の取り組み」

松尾憲暁(名古屋大学), 加藤淳(同), 鈴木かおり(同), 徳弘康代(同), 椿由紀子(同), 福富七重(同), 安井朱美(同)

名古屋大学では2週間の日本語プログラムを年2回実施しています。当日は、生教材を利用した教材開発, 学習者同士や日本人学生とのグループ学習, Can-Do 記述を利用した評価をテーマにして, みなさんと意見交換ができたと思います。ぜひ気軽にお立ち寄りください。

◆「外国人集住地域の小学校における保護者向け日本語教室の意義向上をめざした実践」

鈴木崇夫(とよた日本語学習支援システム), 松下志寿代(同)

とよた日本語学習支援システムは、豊田市と名古屋大学との共働で日本語教室の開設や運営の支援を中心とした日本語学習をサポートする仕組みづくりをしています。外国人だけではなくその周りの日本人・支援者も対象とし、地域全体で豊田市の日本語学習支援を盛り上げています。地域の日本語学習支援に関心のある方はぜひお越しください。



委員会コラボ企画「昼食交流会」【12:15-13:15】

◆調査研究推進委員会コラボ【52号館 5214】

「日本語教育縦断＋横断 ワールドカフェ

ーあなたのテーマ・私の課題：「日本語教育学」への誘いー

調査研究推進委員会委員：砂川裕一，他

「日本語教育の世界」はどこまで広がっているのでしょうか？ カフェでの気軽なおしゃべりのように、頭や心を優しくほぐしながら「日本語教育の世界の輪郭」をみんなで描いてみませんか？ 皆さんが日頃考えている「テーマ」、抱え込んで悩んでいる「課題」、興味を持っている「活動」などを「共有」し合いながら、一人ひとりの思いや悩みと「日本語教育学」や「日本語教育学会」がどのようにつながっているのか、一緒に考えてみませんか？ 気持ちを揺さぶるカフェでの出会いとセッションを！！

◆チャレンジ支援委員会コラボ 【52号館 5218】

「発表応募支援セミナー」

チャレンジ支援委員会委員：村澤慶昭，藤田裕一郎

「そろそろ何か発表してみたいけど、どうやったらいいの？」、「応募したけど不採用だったのは、何がいけなかったの？」。そんな皆さんを支援するのも「チャレンジ支援委員会」の使命です！これまで「わかば」シリーズで学会デビューやセンパイとの仲立ちを、「おせっかい侍」で応募書類のチェックをしてきましたが、今回は支部集会にお邪魔して「発表応募支援セミナー」を行います。少しでも発表をお考えの方も、これからという方も、ぜひこの機会をご利用ください！

ワークショップ 【13:30-15:30／52号館 5214】

「見つめ直してみよう 対人関係とコミュニケーション」

講師：徳井厚子(信州大学)

私たちはお互いに完全に理解することは無理ですが、少しでも理解しようとするところにコミュニケーションの醍醐味があると思います。このワークショップでは、前半を1対1の対人コミュニケーション、後半を集団コミュニケーションに焦点を当て、体験を通して学んでいきます。日常生活や教室の場面など、様々な問題に直面した際どう向き合うか、小集団で意思決定を行う際どのようなコミュニケーションが有効か等一緒に学んでいきましょう。



研究発表(口頭発表) 【15:45-16:15/52号館 5215・5216・5217】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム最終頁、詳細は予稿集原稿をご覧ください。

- ① 【52号館 5215】 **マルチメディアを活用したピア・ティーチング**
ー東北大学留学生教育における実践例ー
林雅子(東北大学)
- ② 【52号館 5216】 **外国籍社員が気づいていない職場の日本語コミュニケーションに潜在する問題-日本語教育での教育的支援の可能性を探る-**
ケッチャム千香子(上智大学)
- ③ 【52号館 5217】 **異文化間レトリックの知見に基づく作文ライティングの教育実践による学習者の文章観の変容**
近藤行人(名古屋大学大学院生)

◆問合せ先(平日 9~18 時のみ)◆

公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会新館 2F

TEL:03-3262-4291 FAX:03-5216-7552 E-mail: shibu@nkg.or.jp



[2017 年度第 4 回支部集会（名古屋工業大学，2017.7.8）発表・ポスター①]

短期ジャパNSTAディプログラムにおける受講生の意識の変容

野村琴菜・ケッチャム千香子・高橋桂子・難波房枝・村田マルゲティッチ恵美・堀井恵子

A 大学では、日本に興味を持つ海外の若者に日本をより理解してもらうために、課外の体験学習と教室の学習を結びつけた短期の日本学習プログラムを企画運営してきた。短期の日本学習プログラムにおける受講生の意識の変容に注目した研究は少なく、教室内外の活動の相互作用による変容を対象とした実証研究は管見の限りないことから、本研究では、受講生の意識の変容の分析とプログラムの改善を目的に、受講生へのアンケート調査を実施した。質問票の回答を質的、量的の双方から総合的に考察した結果、①学習目標の具体化、②自己有能感、③自律性という意識の変容が明らかとなった。これらは、JFL 環境から JSL 環境への環境の変化により実際使用場面が増加したと受講生主体のプログラムに起因するところが大きいと考えられる。この結果は、今後の短期日本学習プログラムのコースデザインや改善に役立てられるものだと考えられる。

（野村—お茶の水女子大学，ケッチャム—上智大学，高橋—国際日本語普及協会，村田—ザグレブ大学，
難波・堀井—武蔵野大学）

[2017 年度第 4 回支部集会（名古屋工業大学，2017.7.8）発表・ポスター②]

進学後に必要な日本語能力とは

—進学前後の留学生に対する調査からの一考察—

立澤亜沙希

本研究では日本語学校の留学生という新たな視点からアカデミック・ジャパニーズ (AJ) を明らかにし、進学前の予備教育に必要なことを描き出すために日本語学校の進学前後の留学生を対象に「進学後に必要な日本語能力」についての意識を質問紙調査によって調査した。進学後の留学生への調査から AJ を明らかにし、進学前後の調査の結果の比較から進学前に必要な予備教育を提案する。進学前後の意識の比較は t 検定により判定した。その結果から意識の差が現れたものに注目し、それらは進学後により日本語能力が必要になるものだと判断した。

調査と分析の結果から、進学後の留学生から見た AJ を『漢字や難しい語彙が理解できることを前提とし、対象の日本語を理解した上で自己表現ができる能力』とし、進学前の留学生に対する予備教育として求められることをまとめた。今回の提案は日本語学校にとどまらず、進学前の予備教育全体に関わるものとして提言できるだろう。

（名古屋福德日本語学院）



[2017 年度第 4 回支部集会 (名古屋工業大学, 2017.7.8) 発表・ポスター③]

海外の大人数クラスに対する効果的な初級会話指導方法

—教師の指導日記の分析から—

水野沙江香

2007 年から 2 年間、セルビアの国立大学での初級日本語クラスについて記録した指導日記を分析したところ、大人数クラスに対する会話指導において、授業をする中で指導方法を改善していった過程が見られた。学生からのもっと実際の場面で使えるような会話の練習がしたいという要望をきっかけに、指導方法について悩んだ末、主教材の文型や市販の教材を使った会話練習から、自分の国、趣味などのトピックごとに質問例を示し、学生同士グループを作って好きなトピックを選んで練習し、教師の前で会話をして評価表に記入するという形式に変えた。その結果、日本語で自分のことを伝えることができるようになり、評価表で自分の進捗がわかるため成績の評価につながることをわかりやすくなり、熱心に会話練習に取り組む学生が増えたということだった。また、個々の学生に合わせて進めることができるため、出席率や理解度に差がある大人数のクラスに適していたと振り返る。

(愛知工科大学外国語学校)

[2017 年度第 4 回支部集会 (名古屋工業大学, 2017.7.8) 発表・ポスター④]

背景要因の異なるタイ人学部留学生の学習ストラテジー使用要因の分析

—Oxford (2011) の S2R モデルに基づいて—

MANJAITON SANI

本発表では背景の異なる 4 名のタイ人学部留学生の学習ストラテジーの使用要因を報告する。Oxford (1990) の SILL と Oxford (2011) の S2R モデルを基にして作成した質問紙の回答に基づき、半構造化インタビューを行い、M-GTA の手法を援用して学習者の学習ストラテジーの使用要因を抽出した。その結果、共通した使用要因として、①<言語学習の目的>、②<学習に対する問題>、③<学習者の気持ち>、④<学習環境>がみられた。また、他者と関わりのある学習ストラテジーとして、<学習環境>+<言語学習の目的>と、<学習環境>+<学習者の気持ち>、<学習環境>+<言語学習の目的>+<学習者の気持ち>の 3 パターンの複合的使用要因が多くみられた。

(名古屋大学大学院生)



[2017 年度第 4 回支部集会（名古屋工業大学，2017.7.8）発表・口頭①]

マルチメディアを活用したピア・ティーチング

—東北大学留学生教育における実践例—

林雅子

東北大学では「学生の主体的な学び」を引き出す教授法として授業に「アクティブ・ラーニング」を取り入れることを推奨している。その一環として東北大学留学生において「ピア・ティーチング（peer teaching）」を行った教育実践例を報告することを目的とする。本実践例では、日本語学習者が教師として実際に教壇に立って教える形式を取り入れた。具体的な実践方法として、中級・中上級の文法の授業で、項目ごとに担当者を決め、用例を採集して項目の説明を実際に自分で用例を作って提示するという課題を課した。さらに、用例採取の際に、実際の実例を、論文・ニュースなどのもとより、マンガ・アニメ・ドラマ・映画・音楽などから採取し、その用例の画像や動画を活用することを義務付けた。ほぼすべての学習者から、用例採取が楽しかった、また同じアクティビティをやりたいという声があがった。

（東北大学）

[2017 年度第 4 回支部集会（名古屋工業大学，2017.7.8）発表・口頭②]

外国籍社員が気づいていない職場の日本語コミュニケーションに潜在する問題

—日本語教育での教育的支援の可能性を探る—

ケッチャム千香子

本研究は、外国籍社員（以下、FB）が日本の職場に適応していくために日本語教育が果たすべき教育的支援の可能性を探る目的で、属性や職場環境が異なる初期キャリア形成期の FB 11 名にインタビューを行い、職場の相互行為で FB が日本人社員（以下、JB）の規範に気づいていない事柄を調査し、コミュニケーションに潜在する問題について考察した。滞日期間が短い FB の中には、聞き手である JB の理解度や、「謝罪」などの発話行為に存在する文化差、会議参加で考慮される上下関係に気づかず、日本語の文法能力や社会言語能力に関する批判的内省の機会がないままに、相互行為の相手を否定的に評価する例も見られた。FB が日本の職場に適応していくためには、水平的関係の JB 同僚との関係を深め、FB 自らで問題を意識し能動的に経験学習していける対人関係の構築が必要であると考えられる。本発表ではその関係を構築するための日本語教育での支援について論じる。

（上智大学）



〔2017 年度第 4 回支部集会（名古屋工業大学，2017.7.8）発表・口頭③〕

異文化間レトリックの知見に基づいた作文教育実践による学習者の文章観変容の事例

近藤行人

異文化間レトリックの分野の知見に基づく作文教育実践では、多様な文章と多様な文章観を知り、書き手が状況に応じた文章を自己決定する必要性が指摘されている。このため、本発表では、「自分の文章の特徴を知り、読み手の想定にそった文章に修正することを通じ、多様な文章と文章観を知る」ことを目的とした作文授業を実施した。本発表では授業後のインタビューや書かれたエッセイを分析し、学習者の文章観の変容を検討する。分析の結果、学習者は授業前と比べ、文章の目的が具体的に想定された読み手を納得させることへ変容したこと、自身の文章がウズベキスタンの文化的背景の影響を受けていることを意識化したこと、日本語教育で受けた指導に対する違和感の解消が生じたことがわかった。これらの結果から、教育現場では、学習者が書きたい文章と教師が書かせたい文章について、教師と学習者の双方が気づきを得ていない可能性が示唆された。

（名古屋大学大学院生）

以上

